

セミナー「オーガニック×農福連携×学校給食」概要詳細 (大分☆農・カーボンプロジェクト第11回勉強会)

1 日時：令和6年7月17日(水) 13:30~16:00

2 場所：ホルトホール大分 302・303 会議室

3 参加者：

講師：オーガニックパパ株式会社 代表取締役 1名

事例発表：臼杵市有機農業推進室長 1名

佐伯市農政課副主幹 1名

会場参加者 60名、オンライン参加者 19名 (総出席者数 79名)

(このほか、九州農政局等組織内オンライン参加者 43名)

4 勉強会概要

「大分☆農・カーボンプロジェクト」第11回勉強会(本年度1回目)として、「オーガニック×農福連携×学校給食」をテーマにしたセミナーを開催。幅広い視点で有機農業の進め方を考える機会を提供する場として、オーガニックビレッジ宣言した臼杵、佐伯両市の取組状況の事例発表及びテーマに関する基調講演を実施した。

概要詳細は、添付ファイルのとおり。

なお、セミナー終了後に、大分県拠点(または当拠点)が委嘱した「おおいた「みどり戦略」オフィシャルインフルエンサー」の「株式会社 Kabosu Company」が、自身と基調講演講師との対談の動画撮影を行い、翌日(7月18日)に同社のYouTubeチャンネルに掲載された。

(1) 大分県拠点地方参事官あいさつ概要

先日閉会した第213回通常国会において、「食料・農業・農村基本法の一部を改正する法律」が、可決・成立したところ。近年の食料・農業・農村をめぐる情勢の変化に対応し、食料安全保障の確保、環境と調和のとれた食料システムの確立、農業の持続的な発展のための生産性の向上、農村における地域社会の維持などを図るため、基本理念を見直すとともに、関連する基本的施策を定めるものである。

このうち、環境と調和のとれた食料システムの確立に向けた施策のひとつとして、農林水産省では、「みどりの食料システム戦略」を踏まえ、有機農業に地域ぐるみで取り組む産地、いわゆる「オーガニックビレッジ」の創出に取り組む市町村の支援を進めている。大分県内では、本日お話いただく臼杵市、佐伯市に加え、本年度当初には豊後高田市においてもオーガニックビレッジ宣言がなされ、有機農業実施計画に沿った取組が進められている。

また、本日、基調講演いただくオーガニックパパ株式会社代表取締役におかれては、微生物を活用した土づくり、福祉サービスをベースとした農園経営、有機農産物の学校給食やレストランでの提供など、様々な方法が効果的に融合した有機農業を進められている。

環境と調和のとれた食料システムの確立に向けては、農業生産のみならず、消費者の皆様や、農産物の加工や流通関係の皆様など、幅広い立場の方々に御理解いただき、可能なことから行動に反映していただくことが大変重要である。

本日の勉強会にも、農業生産者、消費者、福祉事業所、保育園、大学、自治体ほか、幅広い立場の方々に御参加いただいている。是非、それぞれの立場で、皆さんが元気になるような有機農業の進め方や環境と調和のとれた食料システムの確立に向けて、それぞれの立場でできることは何だろうか、といったことを考える「きっかけ」の場にしていただけると幸いである。

(2) 事例発表「オーガニックビレッジの取組」

- ・臼杵市有機農業推進室長「有機の里づくり ～うすきの「食」と「農」を豊かに～」
- ・佐伯市農政課副主幹「佐伯市 有機農業への挑戦」

(3) 事例発表での質疑応答の概要

(参加者)

学校給食において安心・安全なものを作っていくとの内容であったが、現在は、発達障がい者の方が増えている、それも食べ物が影響しているとの話を聞く。学校給食の安心・安全と発達障害についての考え方をお聞かせいただきたい。

(臼杵市)

当市の学校給食については、より安心・安全な農産物を供給し続けることを目的とし、国の「みどり戦略推進交付金」を活用しながら実証事業等に取り組んだところ。学校給食に安定的に供給するには、ロットの確保が必要である。学校側も安定的に入らない農産物の受入は難しいとの意見もあり、当市で揃えられるじゃがいも、玉ねぎ、人参、この部分から全量供給できれば取り組んでいるところ。将来的には米についても、有機米に全量変えられる可能性もあると考えている。

もう一つは食育。学校給食に有機農産物の提供を進めながら子どもたちへの食育活動も行っている。学校での収穫体験などを通し、収穫した野菜を給食に使ってもらうなどして子どもたちにより安心・安全な食べ物、美味しい給食を提供することができるよう取り組んでいる。

(佐伯市)

食育について、アレルギー、アトピーをお持ちの方は病院に行っても改善しなかった方々が試行錯誤する中で有機の野菜を使ったときに改善したよ、ゆくゆくは治ったよとの話を聞いていて、そのような中で有機野菜を求められている親御さんがいらっしゃることに対してはいいと思う。

もう一つは、佐伯市のスタンスとして環境への配慮である。有機農業に取り組むことで、温室効果ガス削減に貢献できるので、地域の環境のことを小中学生、保護者にも知っていただきたいと考えている。

ロングランの計画として、有機農業者の収入の安定のためには販路の確保が必要であり、農家の方が作ったものが売れる仕組みを構築していきたいと考えている。

(参加者)

当市の議会で「オーガニックビレッジ宣言はどうか」との議員の質問に対し、市から「有機農業は役場から推進するものではなく、農家の方が希望すれば支援する」との回答があったと聞いた。市は公平な立場なのでこの回答は妥当かと考えるが、有機農業がよ

り安全との話となると、そうじゃない農業は安全ではない、兼業農家で除草や手間暇がかかるからできないといった反発があるとか、難しい一面があるのではないかと思う。臼杵市、佐伯市も先進的に取り組まれているが、どういう形で克服されたのかお聞きしたい。

(臼杵市)

当市の有機農業の大きな転機は、令和3年、国がみどりの食料システム戦略を打ち出し、有機農業が全国区になったと認識している。それまでは、有機農業を推進するのは難しい一面もあったが、それでも当市は有機的なたい肥、完熟たい肥(夢堆肥)を使った土づくりから始まり、有機農家や慣行農家も両方、土づくりとして使っていたが、その土づくりの取組も評価され、ユネスコ食文化創造都市の加盟が認められたと認識している。

各市町村、いろんなご苦労があると思うが、トップダウンでしなければならないこともあるし、現場サイドから進めていかなければならないこともある。最終的には有機農業を推進している市町村が連携・協力して進めていくことが必要ではないかと考える。

(4) 基調講演「オーガニック×農福連携×学校給食」

・オーガニックパパ株式会社代表取締役 「農業の多様性と地域循環」

(5) 基調講演での質疑応答の概要

(参加者)

市議会議員として、オーガニックビレッジ宣言を行うよう提案し、広めていきたい思いがあって参加した。

有機農業を行うほ場の周辺で、ヘリコプターによる農薬散布を行っている慣行農家の方がいるが、どうやって相互理解していけばよいのか、できれば農薬散布を止めてほしいという思いもあり悩んでいるところ。アドバイスをいただきたい。

(講師)

有機JASであれば、上の田んぼは一発除草剤を散布し、下の田んぼは有機の田んぼの場合に同じ水を使っていて影響はないのかと言えば、答えは「影響はない」となる。土づくりというのは地球の中心に向かって真下に伸びていく。例えばパネル1枚だけの土づくりはできる。その結果、この野菜と隣のパネルの野菜は違う。ということで、空中散布も仕方ないとあまりストイックに考えすぎずに、JAS基準をクリアしていればの考えで良いのではないかと。

(参加者)

別府市の内成の棚田で農業をしている。中山間地域はハウスも建てられず基本的には露地栽培である。除草剤、農薬をできるだけ使わずにといつた時に人手が足りない。どのような対応をしているのかお聞きしたい。

(講師)

当社では、草取りは基本しない。草取りは追い付かないし農業にならない。初期にブラックマルチの穴から生えている草を取るくらい。草取りをしなければならない程度の場合、追い付かないから漉き込んでいる。このため、種まきの野菜は事前に透明なマルチを張り太陽熱養生をしている。地熱の温度が累積して900度くらいになれば、雑草は死滅し生えてこない。

(佐伯市)

佐伯市の有機野菜の農家の方で、試験的ではあるが農福連携で福祉の方に除草作業の協力をいただいている。お米に関しては、深水対策であるとか工夫しながらやられている。

(参加者)

発達障害についての質問である。私が読んだ文献には、一番混ざりものが多いのはオリーブオイル、次いで牛乳、3番目がハチミツで、牛乳は未曾有の心配がある。これらと発達障害との因果関係を教えていただきたい。

(講師)

九州大学の先生たちに精神病についてかなり教えていただいた。九州大学は、精神病に関して早く前から研究されていて、心療内科という言葉も九州大学でできたそう。精神病というのは50年くらい前まではなかったそう。

因果関係については、30年前からの論文で世界中に出ているとのことで、特に最近言われるのはグリホサート系、ネオチコロイド系農薬。除草剤、枯れ葉剤による発症もフェード1、フェード2とあり、フェード3で発症する。いわゆる孫世代で発症するとのこと。

化学物質の影響は、一律の率で出るものではなく交通事故に合うような例え。事故にあったものが悪くなるというような、誰に症状が出るかわからない確率論だそう。

精神病の因果関係の大体は化学物質にあるとのことで、そのなかで一番影響しているのは、やはり農薬であると九州大学の先生はおっしゃっている。

以 上